

## 愛知県立芸術大学音楽学部特別講座（音楽学主催）と そのアンケート結果について

増山賢治（愛知県立芸術大学音楽学部教授）

音楽学コース主催による平成 17 年度特別講座として、クレモナで活躍中のヴァイオリン製作作家、松下敏幸氏の講演「ストラディバリを超えるヴァイオリンをめざして」が 2005 年 11 月 16 日(水) 17:00-19:00、本学の新講義棟で開催された。前半はスライドを使った分かりやすい講演、後半はパリ国際弦楽器&弓製作コンクール of ヴァイオリン部門音響・最優秀特別賞を受賞した楽器を含む実演（弾き比べ）が行われ、ヴァイオリンの製作過程、クレモナの歴史と現在、ストラディバリの音の秘密解明など興味深い内容であった。

今回の特別講座では、はじめての試みとして学外からの来聴を募集したところ、大きな反響があった。また、来場者にアンケートを実施した結果、回収率も上々で、今後特別講座を運営する上で大変参考になった。事前に多数の申し込み者があることは分かっていたが、何分にもはじめての公開特別講座、当日まで不安をぬぐい去ることはできなかった。しかし、良い企画を立案し今回の立案者は井上さつき教授）、周知をうまく行えば 相当程度の成果が見込めることを主催者一同実感した次第である。以下、アンケートの集計結果から読み取れる事柄をまとめてみた。

### (1) 企画内容がカギ

本学の特別講座に限らず、イベントというものは企画内容が最重要だと思うが、今回の特別講座がアンケートのコメントから見る限り、年齢、性別、職業などによる偏りは見られず概ね好評だったことが伺えるのもやはり企画内容によるところが大きいと思われる。もちろん、100%というわけには行かなかったが、「大変に興味深い話で満足でした」（33 歳、男性、楽器製作）、「本質を見抜く、伝統を受け継ぐ等、共感するところが多く、大変、参考になりました。」（49 歳、女性、高校教員）、「歴史の話も詳しく聞け、興味深かった。製作上の話もう少し聞けるとよかった。」（40 歳、男性、公務員）のような好意的な感想が多数寄せられた。そして、「音の違いがハッキリと分かり、楽しかったです。歴史の勉強もできて、製作を目指す者にとって面白かったです。」（20 歳、女性、学生）、「ヴァイオリン弾きという立場から考えても、製作者の生の話が聞けてとても面白かった。」（24 歳、女性、学生）といった熱い反応を見ると、楽器製作者の専攻コースを音楽大学に設置するというのも具体的に考える時期に来たような気さえする。

また、会場までの所要時間に関しては、最も多かったのは 1 時間以上 2 時間未満（31%）で、次の 30 分以上 1 時間未満がほぼ同数の 30% であったが、少数とはいえ、2 時間以上 3 時間

未満(7%)、3時間以上4時間未満(1%)、5時間以上(1%)という来場者がいたことは予想外の驚きであった(グラフ参照)。

## (2) 事前準備、広報の大切さ

応募ハガキその他による外部からの申し込み者114名に本学関係者(主催講座を除く)61名を加えた175名が来場したが、これは事前準備、広報の成果である。グラフによれば、主に広報活動は新聞(特に中日新聞)に依拠するところが大きかった(68%)ことが分かり、新聞、テレビなどマスコミの重要性を再認識した。そのことは、「私は今年、NHKのハイビジョン番組で、松下先生の活躍を知り、大変感激しました。2004年のパリでの最優秀賞を取ったときのドキュメントでした。今回の講座を新聞で知り、是非聴講したく思いました。…(下略)」(62歳、男性、無職)のように、NHK衛星第2 2005年3月22日(火)23:00-24:00放送の「遠くにありてにっぽん人“ストラディバリを越えたい・イタリア・松下敏幸”」を見て今回の講座に応募したというアンケートからも確認することができた。

主催者として気になったのは、本学のHPから特別講座のことを知った人が少なかった(9%)ことで、これは若年層の参加者がやや少なめだったことにも関係していると思う。本学HPの充実化の必要性を痛感した。今回は往復はがきによる申し込みという何とも古典的な手法を採用したが、それも残しながら、これからはHPを通じてネットによる申し込みを主体とする方向に移行すべきだろう。

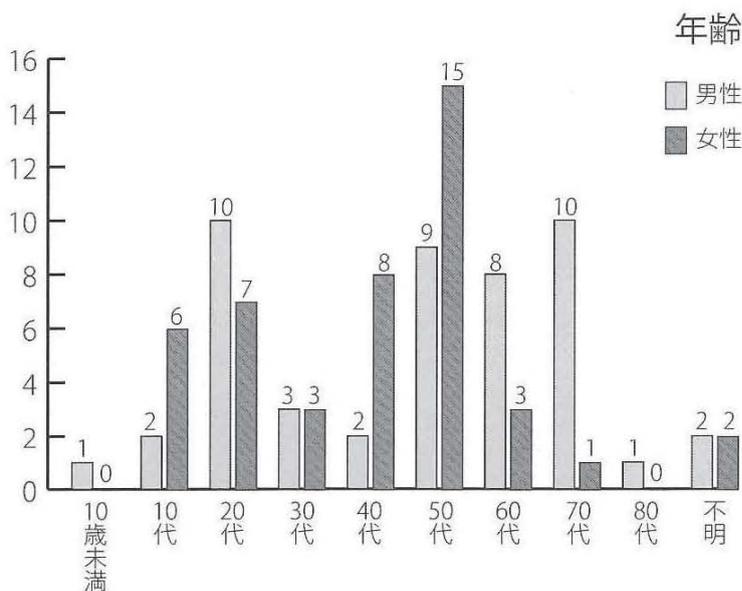
## (3) 今後の課題と展望

今回の特別講座にこのような大きな反響があったことで、特別講座の対外開放へ向けて他コースも、というより、大学全体で真剣に検討する時期に来ていると思う。ただ、そうした環境を整えるには本学には改善すべき点が多々あることも事実である。グラフによれば、会場までの交通手段として自家用車(41%)、リニモ(46%)となっているが、本学のアクセスの悪さは、対外開放に大きな支障となっていることは周知の通りである。何とか改善策はないものだろうか?

そして、希望開始時刻が17:30～(47%)、18:00～(25%)とやや早めの時間が大半を占めているのもそれに起因するものだろう。実際、今回は講座終了後、極寒の中、皆、帰路につくということになったが、特に高齢者には気の毒な話である。

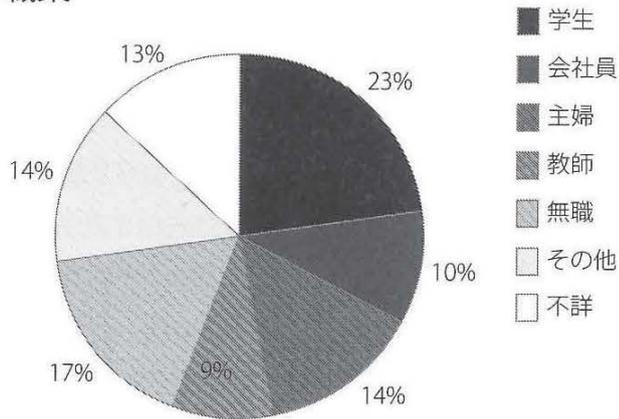
本学の講義室、研究室の冷暖房設備およびAV機器の充実も不可欠である。特別講座の開催に際して、本学は基本的に夜間、冷暖房が使えないという不便さが浮き彫りとなったのは誠に遺憾であった。今回は音楽学部長の尽力と事務局の配慮もあり、例外的な措置で事なきを得たが、社会貢献を推進する立場にある大学は24時間眠らない場所であるはずなのにまさに理不尽な環境と言わざるを得ない。その他、本学は講演、コンサートの記録(撮影、録画など)をするためのシステムが不十分であることも思い知らされた。

とはいえ、今後の特別講座のあり方を考えるのに有益なコメントを得ることができたのは望外の喜びであった。例えば、「ヴァイオリン製作を今しているのですが、とても参考になりました。専門知識のない人には難しい講座だと思いました。今回の講座をふまえた上の講座も聴いてみたいとおもいました。(下略) …」(23歳、男性、専門学生)、「非常に満足しております。しかし聴講の対象をある程度絞らないと講師の方が大変かなと思いました(話す内容等)」(30歳、女性、会社員)、「(前略) …今はどうかわかりませんが、以前は卒業生しか授業の聴講はできなかったのですが…。色々、開放されるといいですね。」(53歳、女性、ピアノ教師)。「ヴァイオリンの音色の違い、良く理解出来た。(中略) …更にこのような講座に参加して勉強したい。」(73歳、男性、無職) などからは、ある意味で限定されたテーマ、専門的内容が盛り込まれていたにもかかわらず幅広い層が来場したことが分かり、50代以上の人々の熱心さが浮き彫りされ、生涯活動教育の充実化が急務であることが証明されたのではないかと思う。それらは大学改革の方向性を考える上で参考とすべき、有益な情報である。今回の特別講座は幸いに好評を得たが、同じようなものの繰り返しでは発展は望めないことは明らかで、単に地域貢献、コラボレーションの必要性を呪文のように繰り返したところで何もならないだろう。その時代時代のニーズを反映するもの、先取りするようなものを音楽学コースとしては常に考えて行きたいと思っている。それには、特別講座を名古屋市内で開催できるようにするのも一案かも知れない。今回のアンケート実施の発案者は音楽学部長の安元弘行先生、アンケート結果をまとめたのは音楽学コースの院生、学部生の諸君である。そのお陰で本稿を執筆することができた。ここに感謝を申し上げる。



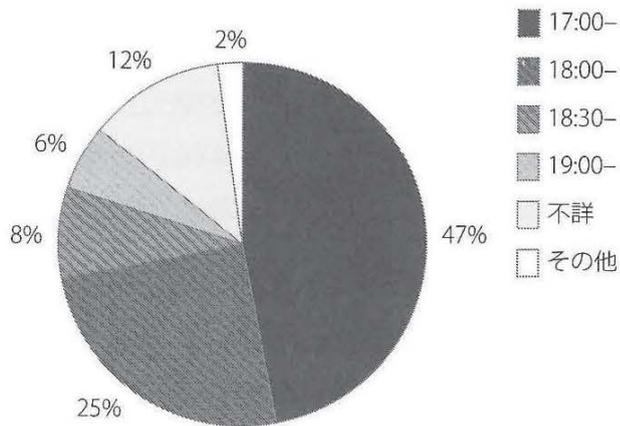
20代、50代の参加が多かった。男女比はわずかに男性が多いもののほとんど半数ずつであった。

### 職業



その他の職業にはピアノ調律師・楽器製作者・人形作家・アートプロデューサーや医師・臨床検査技師・介護師、公務員・自営業などがあつた。

### 今後の特別講座の希望開始時刻



今回は新聞を見ての希望者が多かつた。新聞社の内訳は中日新聞が75%・朝日新聞が9%・不詳が16%であつた。

### 会場までの所要時間

